



オンリー
ワン

川崎ゆきお

「オンリーワンで行くしかないか」

イラストレーター志望の龍一がいう。

「ナンバーワンを諦めるの？」

彼女の玉美が不機嫌な顔で問う。

「どの公募に出しても佳作止まりだし」

「超一流のイラストレーターになりたかったんじゃないの」

「オンリーワンのほうが流行ってるんだよ。ナンバーワンなんてもう古いんだぜ」

「諦める人が増えただけじゃん」

「一流って、維持するの大変なんだよな」

「でも、有名になれるじゃないの。一回でもトップとったほうが、あとあと楽だと思わない？」

「トップランナーも疲れるさ」

「心配だわ、そんなことで食べていけるの？」

「だからさ、ナンバーワンでなくても食ってる先輩いっぱいいるよ。心配しなくてもいいから」

「ほんとかあな...長続きしないんじゃない」

「やめて行く先輩も多いけどさ。営業力で切り抜けるんだよ」

「その先輩たちも一流を目指しててたんでしょ」

「俺と同じ齢のころはね。でも現実は厳しいらしいよ。全員がナンバーワンで、トップランナーってわけにはいかないんだからさ。ほとんどが負け組さ」

「だから、最初から、諦めるの？」

「諦めちゃいけないけどさ。佳作でよくできました程度の力しかないんだな。これって努力じゃなく、才能なんだよ。あとは運かな」

「じゃ、運しか残ってないじゃん」

「うん」

「イラストレーターって儲かるんでしょ？」

「一流はね」

「じゃ、だめじゃん。二流とか三流じゃ。やっぱりナンバーワン目指しなさいよ」

「だから、さっきから言ってるじゃない。オンリーワンがあるって。ナンバーワンを目指すよりオンリーワンを目指す時代なんだよ」

「じゃあ、どうするのよ？」

「マイイラストを書くんだよ」

「何それ」

「自分のイラストを書くんだよ」

「それって、普通じゃない」

「普通って？」

「龍ちゃんがいつも書いてるいつもの絵を書くだけの話でしょ。それでだめだから佳作なんですよ」

「馬鹿にすんなよ。佳作入選だけでも凄いことなんだからさ」

「じゃ、もっと喜んでよ。佳作に入ったって」

龍一は仕方なく喜んでいる表情を作った。

「苦しそう龍ちゃん」

了